

「清紫会」だより

- ◆第152回 平成二十九年二月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・鮎ののり巻／小野澤繁雄・昔ながらの／松井淑子・仕掛け人は誰か
- ◆第153回 三月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉小野澤繁雄・みていないこと／林博子・ひかりの春
- ◆第154回 四月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室
〈提出作品〉市川茂子・黒たまご漬け／小野澤繁雄・インソール／林博子・千鳥ヶ淵／松井淑子・落書き

無二の会短信

◆三月十日、三男の弟が日赤病院に救急搬送される途中に電話があった。脑梗塞らしいとのこと。妻を亡くして、二人の息子達は離れていて独り暮りで心配なので、すぐに駆け付けた。早く処置出来たので重症にならないだろうと聞いて少し安心したが、リハビリが長く続くのではと覚悟をする。四月末になって、老人会の会長を引き受けてくれたT氏が胃癌で入院の知らせがあり、副会長にもどったのに、また多忙な仕事となり、短歌に向き合う時間が少なくなった。それでも、作歌の完成が早いほうではないので、悩みの種ではある。

池田桂一

◆晴天の穏やかな昼過ぎ、急に風が出てぼつぼつと雨粒が飛んで来た。傘をもたずに出たが、日照り雨だからすぐ止みそうだ。反対側を見たら、ビルとビルにかけ橋のように虹が架かっている。七色がはっきりわかるような、うす紫色があざやかに見える。絵本にでている虹や、遠い日の自然で見た思い出ぐらいで、こんなに近くで見ることがなかったので、郷愁を感じる一瞬だった。

市川茂子

◆定年後、非常勤の二年を経過した後で一年が経過した。父が亡くなった年齢（六十八歳）になっている。やつと属性で無職とする（ブックオフに本を持ち込んでも、チェック欄がある）にも慣れたようだ。無職には違いないのだった。全体に時間があるようなところ、それでも用のあるような日程がすぐくるよ